まちなか回遊における休憩の風景に関する研究

熊本大学大学院　学生会員　○池田昌弘　　熊本大学　正会員　田中尚人

1. はじめに

モータリゼーションの進展等，様々なことを要因として起こる中心市街地の衰退・空洞化に対して，賑わいの再生･創出が叫ばれて久しい．その解決策として，回遊性の向上や魅力ある市街地空間の整備，人間中心のアクティビティを創出することなどが挙げられており，生活の多様性の変化や少子高齢化，近年では COVID-19 によるパンデミックの影響もあり，賑わいの捉え方も変容してきている．

また，都市の中での休憩行動は，近年の休憩空間へのニーズの多様化やコロナ禍を通じた外部空間での過ごし方の価値観の変化もあり，注目が集まっている．

そこで本研究では，熊本市中心市街地を対象とし，都市回遊の中での休憩行動に着目し，回遊における休憩の意義を風景として明らかにすることを目的とする．

本研究において風景として明らかにするということは，都市の平面的な側面と，アイレベルの側面を合わせて議論し，明らかにするということと定義する．

2. 概念整理及び仮説の設定

(1) 本研究で扱う概念の整理

都市アクティビティについて，ヤンゲール [1]が都市活動の分類を行っており，滞留活動は，多かれ少なかれ必要に駆られて行う活動である必要活動と，発生が大きく設えに影響される余暇的な任意活動に分かれているとしている．

休憩行動について整理すると，待ち合わせ等のこれからの活動を考える始まりの休憩，疲れて一休み等のこれまでの活動を考える終わりの休憩，荷物を整理する・立ち止まる等の一連の行動の中にある途中の休憩の 3 種類に分類できた．

(2) 質的連続行動モデル

都市アクティビティ図の各アクティビティをノードとして，街での一連の来街者行動をアクティビティの連なりとして表した図（**図 1**）であり，回遊性の高さが，連なった量と矢印の長さにより表される．

(3) 都市アクティビティの分類図

都市アクティビティ図に，大まかなアクティビティの領域を置いたものを都市アクティビティの分類図（**図 2**）とした．この中で休憩行動は，生活的行動や余暇的行動に付帯的に起こるものであり，それ自体が来街目的にならない活動である．

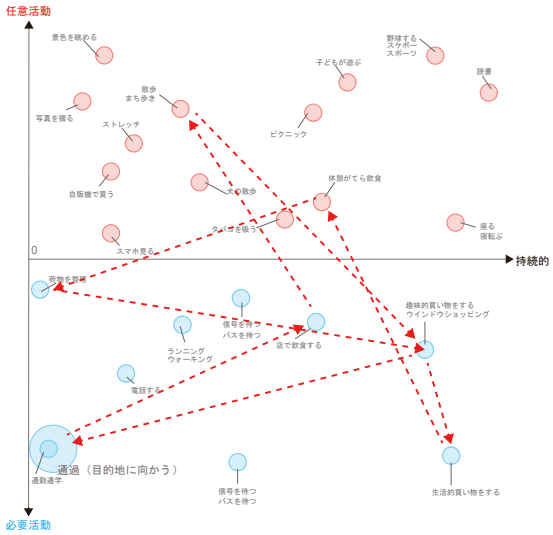

図 - 1　質的連続行動モデル

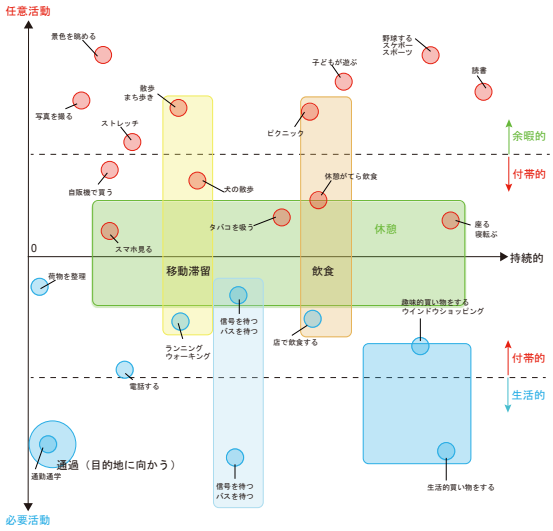

図 - 2　都市アクティビティの分類図

(4) 回遊行動促進における休憩行動の意義

質的連続行動モデルを用いたプレ調査を行った結果，都市アクティビティの中で付帯的な活動を挟むほど矢印の長さが長くなり，より多く連なることが考えられた．付帯的な活動である休憩行動は，回遊行動と大きく関わっており，休憩行動をすることにより，街での滞在時間が長くなり，次の行動を起こすきっかけとなっていることが予想される．

3. 熊本市中心市街地の回遊状況分析

本章では，熊本市中心市街地における都市構造と休憩空間を整理した上で，データワイズの人流データを用い，回遊状況を分析した．

(1) 研究対象地区の概要と都市構造の整理

研究対象地区は，人口 74 万人を誇る熊本市の中心市街地として知られる上通・下通地区を選定した．幹線道路に囲まれている本地区は，南北に延びるアーケードを軸に，歩行空間として一定のまとまりをもっている．QGIS を用い，公共施設や集客施設，役場などの回遊行動に大きく影響を及ぼす施設を地図にプロットし，都市構造を整理した．

(2) 休憩空間の位置関係および数

現地踏査により，ベンチなどの休憩のための設えのある空間と，その他の休憩している空間をマップにプロットし，その数と位置関係を把握した．

(3) まちなかの回遊状況

データワイズの人流データを用い，まちなかの回遊状況を提示した．データワイズでは，各通りを施設登録し，施設分析によって来訪者の「延べ人数」「ユニーク人数」「平均滞在時間」が分かる．そのデータを平日，休日，コロナ前後で整理した．通りごとの延べ人数とユニーク人数を，通りの面積で割ったものを単位面積当たりの歩行者密度とし，これを回遊の指標とした．

(4) 結果の分析及びまとめ

回遊量によってランク分け・色分けし，地図上に表現した．（図３）色分けしたものに対して，回遊状況を分析し，都市構造及び休憩空間と照合し，関係性を見た．その結果，回遊に大きく関係している休憩空間として，びぷれす広場，蓮政寺公園，ココサ前の 3 つの休憩空間が抽出され，3 つの空間を調査対象とする．

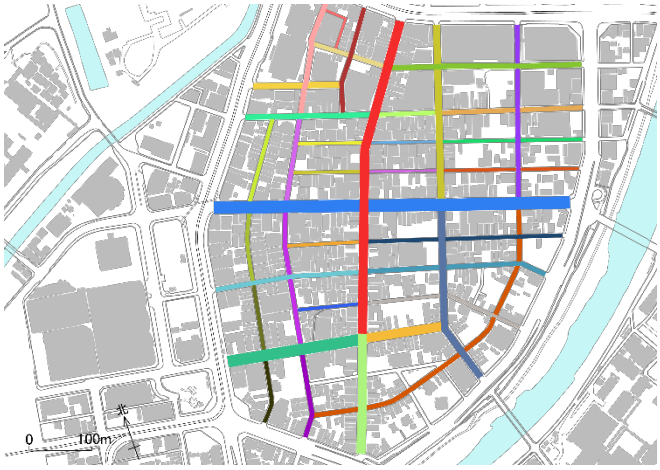

図 - 3　下通における回遊量

4. 休憩空間における休憩行動分析

本章では，抽出された休憩空間に対して設えの分析を行った．そして，休憩者に対しヒアリング調査及び追跡調査を行い，休憩行動を分析した．

(1) 休憩空間の設え

3 つの休憩空間の設えを，平面図と現地踏査により整理し，空間の特徴を把握する．

(2) 休憩空間の利用実態

3 つの休憩空間に対して，データワイズによる施設分析を行い，利用者数と利用者の属性を平日休日コロナ前後で把握し，利用実態をみた．

(3) 休憩行動と回遊行動の関連性

属性（性別・年齢・同行者），来街目的，休憩目的，これからの予定を空間内の休憩者に対してヒアリングし，休憩までの行動と休憩後の行動を都市アクティビティ図を用いて調査した．調査者の内，一人でヒアリングを行い，被験者に番号づけをする．シャドーイングの担当者に番号と被験者を伝え，シャドーイングしてもらい，移動経路と入った施設を地図に記入した．

その結果，休憩行動の分類ごとに来街目的が異なることが分かり，休憩とその後の行動の関連性が明らかになった．

5. まちなか回遊における休憩行動に関する考察

本章では，2 章での仮説を基に，3 章及び 4 章の結果から，休憩行動の種類による回遊行動の変化について考察し，まちなか回遊を考える上での休憩行動が果たす役割について考察する．

(1) 付帯的行動が起こすアクティビティの連鎖

4 章での結果を，2 章で作成した質的連続行動モデルに落とし込み，付帯的な活動が回遊行動を促進していることを明らかにした．

(2) 都市アクティビティの中での休憩行動

都市アクティビティの中での休憩行動の位置づけと，休憩行動の種類による回遊行動の変化について考察を行った．

参考文献

1) ヤン・ゲール：Cities for people 人間の街公共空間のデザイン，鹿島出版会，2014 年.
2) 鈴木雄，木村一裕，日野智，南出拓也：街なかにおける歩行者の滞在特性と休憩空間の認識に関する研究，土木学会論文集(土木計画学)，Vol.68,No.5(土木計画学研究・論文集第 29 巻)，I_417-I_426，2012 年